

鳥取赤十字病院

第25回

人間を救うのは、人間だ。Together for humanity



地域連携懇話会

令和3年

9/15(水)18:30-20:00 (開場 18:00~)



〈テーマ〉 ACP(アドバンス・ケア・プランニング)

～あなたならどうかかわる意思決定支援～

〈内 容〉

「～人生の仕舞い方～ 決めやすいこと 決め辛いこと」

野の花診療所 院長 徳永 進

「医療者・嫁・妻・娘の立場を経験して」

公益社団法人 鳥取県看護協会 在宅支援部部長 鈴木 妙

「東部地域のACPノートの取り組み」

鳥取市福祉保健部長寿社会課 参事 橋本 涉

〈場 所〉鳥取赤十字病院 本館1階 多目的ホール

鳥取市尚徳町117 TEL 0857-24-8111

*会場参加:FAXによる事前申し込みが必要です(50名に制限)

* FAX申込書は当院のホームページに掲載しています。

【駐車券】…無料処理を致しますので、受付時に必ずご提出ください。

【出入口】…本館 防災センター入口 (立体駐車場側)

〈参 加 者〉地域の医療・福祉関係者

〈参 加 方 法〉オンライン参加または会場参加 〆切:9月13日(月)

Zoomでの参加をご希望の場合は、メールにてお申込をお願い致します。

メールアドレス: renkei@tottori-med.jrc.or.jp

〈参 加 費〉無料

後 援 団 体: 鳥取県東部医師会

鳥取県東部歯科医師会

鳥取県薬剤師会東部支部

鳥取県理学療法士会

鳥取市社会福祉協議会

鳥取県介護支援専門員連絡協議会東部支部

鳥取市

鳥取県看護協会

鳥取県作業療法士会

山陰言語聴覚士協会

お問合せ: 鳥取赤十字病院 患者サポートセンター TEL: 0857-24-8111 (代表)

～人生の仕舞い方～決めやすいこと 決め辛いこと

野の花診療所 院長 徳永 進

- # 1. 健康な時→**A**の時→死を迎える時
- # 2. **A**: 急性病・慢性病・老い・認知症・がんの終末期
- # 3. 死は誰もが受け容れ難い
- # 4. 病人の医療人の歴史（おまかせ医療→本人の意思へ）
（パタナリズム・インフォームドコンセント・セカンドオピニオン・本人の意思、病人と医療人、対等）
- # 5. 胃婁について、聞く（点滴もついでに）
- # 6. 延命やDNAR（do not attempt resuscitation）について聞く。
- # 7. 鎮痛（がんの人の末期）について聞く。（家族に限られるか）
- # 8. 安楽死や尊厳死を希望されているかどうか。
- # 9. 過ごす場は、「病院」、「施設」、「ホスピス」、「家」、「その他」のどこが良いか、意見を聞く。
- # 10. 症例① 70歳 女性 肺癌 献体
症例② 29歳 男性 夜中母が背に負い受診
症例③ 65歳 胆管癌受容からの変化
- # 11. 問い詰めない、追い詰めない、誰もが迷う、臨床は迷い迷いの迷い道。
- # 12. 気持ち（意思）は決まり、また「変わる」、が基本。「変わる」は大切。
- # 13. ACP派だけでなく、なりゆき派も大切。「その場その場、その時その時、その人その人」
- # 14. お葬式の形を聞かせてもらえる時もある。
症例④ 独居の84歳肝癌
- # 15. いずれにしろ、死はナイーブな問題をたくさん抱える。「死ぬ時くらい好きにさせて」もある。マニュアルは作り辛い
- # 16. その人や家族が困られないように力をそえよう、と戸惑いながらひとりひとりに、実践していく。

東部地域のACPノートの取り組み

鳥取市福祉部長寿社会課（東部医師会在宅医療介護連携推進室） 橋本 渉

介護保険法の改正により、平成27年度から全国の市町村で在宅医療・介護連携推進事業を実施することとなった。東部地域は、1市4町と東部医師会が主体となり、東部地区在宅医療介護連携推進協議会を設置し、事業の企画・運営機関として、東部医師会在宅医療介護連携推進室を設置している。

厚生労働省が示した事業項目の中「医療・介護関係者の研修」、「地域住民への普及啓発」で、ACPの啓発を行っている。地域包括ケアシステムを植木鉢であらわした絵中で一番重要といわれている「本人の選択と本人・家族の心構え」は、まさにACPであり、同省もACPに「人生会議」と愛称をつけたり、平成30年3月に改訂された「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」にACPの概念を盛り込んだりし、国民への周知が始まっている。

平成29年に仮想症例シナリオによる動画「我が家（うちげえ）に帰りたい」を作成し、多職種研修では在宅療養から看取りの時期での意思決定支援、住民啓発では

自身の意思決定の場面で、ACPを学び、また最終段階になってからのACPではなく、元気な時から繰り返し何度でも考え、話し合う大切さ、最期までどう暮らしていきたいかに重点を当てている。

平成30年には、ACPパンフレット、終活支援ノート「わたしの心づもり」を作成。終活支援ノートは、ACPをせっかく考えたから何か書くものが欲しいという住民さんの声から作成に至った。年間40件程度の住民啓発活動を実施していたが、コロナ禍の現在は年数件と減っている。

終活支援ノートは企業広告による無料作成であったため、ページ数の限度や葬儀関係の広告が多く実際の最終段階の本人・家族に活用しづらいという課題があった。令和2年にACPノート企画WGを立ち上げ、医療機関や介護施設での最終段階を見据えた本人・家族に対しても活用でき得る「ACPノート」を作成した。ステップ1：ACPを考えたとき、ステップ2：気持ちが変化したとき、そしてステップ3：人生の終活を考えたときとし、

3回分のACPを記載できるものとした。ステップ3は、人生の終活を考えたときに、本人と信頼できる人、そして医療・介護関係者が一緒に話し合う内容となっている。質問項目は最終段階での希望など細かく、ページ数も11ページとなる。本人などとコミュニケーションの取り方など配慮が必要となるため、別冊で話し合いの手順などを記したマニュアルも作成した。今後、ACPノートの活用を進めるにあたって、医療・ケアチーム向けの使い方の研修も現在企画している。

私たち専門職も住民の一人、自分のこと、家族のこととして自分自身のACPをまず始めることで、住民と一緒に話し合うスキルを磨いていかなければいけない。



図1 ACPノート表紙

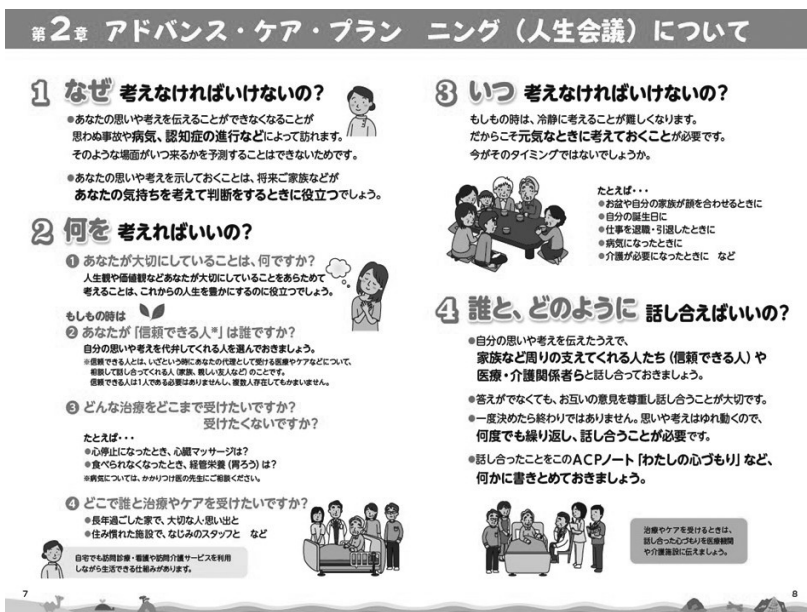


図2 ACP説明ページ

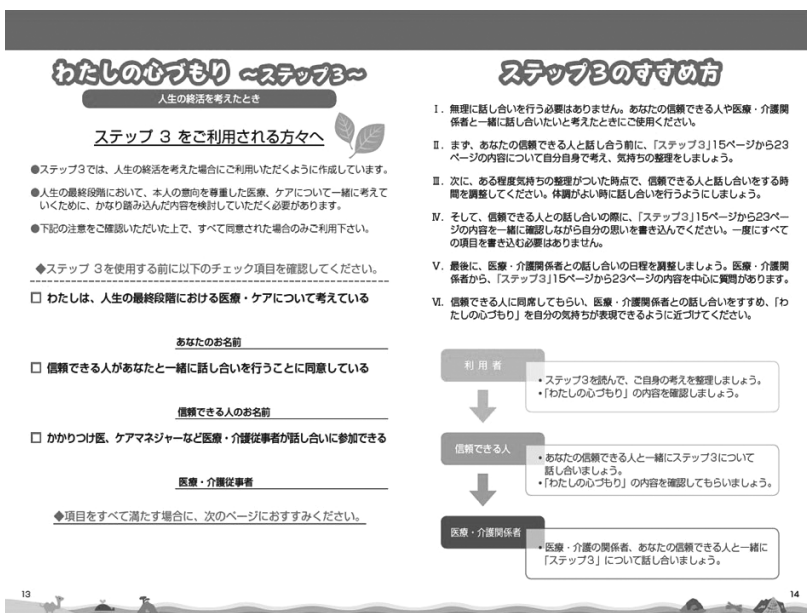


図3 ステップ3人生の終活を考えたとき